

4. シンポジウム
(2) 第二部 パネルディスカッション

それがラグビーの持つ価値観だと思います。海外の人も、試合が終わったらおじぎをしてくれるし、日本の文化を取り入れて、日本をリスペクトしてくれる。お互いがお互いをリスペクトし、良いラグビーをして、いろんな人に喜んでもらいたいという、その視点が素晴らしいと思います。

■井上／ラグビーでは有名な「ノーサイドの精神」があります。一方、車いすでも激しく、相手の車いすを壊すぐらい激闘しますね。

■Melton／Of course, there are situations where the chairs break, but we never know if it's our fault or the other guy's. We have lots of spare wheels ready during matches so they can be switched out.

■井上／車いすの進化はすごいと思うのですが、ラグビーを通してみると、車いすはどのように変化していますか。

■Delagrave／Before wheelchair technology began to evolve, we used typical wheelchairs like the one I'm in now for matches. The chairs we use now are expensive, they're made of aluminum and titanium. Wheelchairs designed to properly fit our bodies and suit their role on the courts were developed. Some of the players have really expensive chairs that are worth around \$10,000.

■井上／最先端の技術が使われているのですね。オリンピックは、最高の技術と、選手のスキルと、戦う心とがそろって初めてできると思うのですが、パラリンピックの面白さは、道具の進化もあると思います。それについてどう考えていますか。



■メルトン／はい、もちろん車いすは壊れることはありますが、それは自分のせい、相手のせい分かりません。試合では、すぐ取り替えができるよう、いろいろな車輪を用意しています。

■デラグレーブ／今ほど車いすが進化する前は、いま私が座っているような普段の車いすでプレーすることもありました。今はアルミやチタンを使った高価な車いすになっています。我々の体にしっかりフィットする、コート上での役割にフィットする車いすが開発され、例えば1台1万ドルというような高価な車いすを使ってプレーしています。

■Aoki／As mentioned before, the equipment we use has really evolved. For instance, videos of the wheelchair rugby from the 1950s show players using normal chairs like the one I'm using. But the chairs we use now are customized to completely fit our bodies. The best equipment in the world allows us to perform at our absolute peak. Using this kind of equipment makes people with disabilities want to try participating. I think this kind of progress is good for athletes and for everyone else too.

■井上／スポーツをやっている中では、チームメイトがお互いに意見を言うことがとても大事なことだと思いますが、皆さんは日頃、どのような関係ですか。

■Delagrave／I started participating in the team from 2010, but to be honest the relationship side of things didn't go well for the first 3 years. But after that there started to be less distance between us, we became friends, or almost like a family.

■Wheeler／Last night we went to karaoke together, so I think it's safe to say we're friends. I think we're really close as a team. Sometimes there are pretty strong differences of opinion, but that's because people want to express themselves for the team.

■井上／激しく意見がぶつかり合うとのことですが、ぶつかったとき、最後はスポーツですから、1つの答えを出さないといけないと思います。そのときは、どうされるのですか。キャプテン、あるいは監督など、役割があると思います。皆さんのチームは、どのようにされているのでしょうか。

■アオキ／先ほどお話がありましたが、我々が使う機器は本当に多大な進化を遂げています。例えば1950年代の車いすラグビーの映像では、今私が座っているような普通の車いすでプレーしています。今の機器は、完全に我々の体にフィットするようカスタマイズされたもので、それによって世界最高のパフォーマンスが、世界最高の機器で可能になっています。そういった機器を使ってプレーすることで、障害を持った方も、いつかプレーしたいという気持ちになります。アスリートにとっても人々にとっても、素晴らしい進化は良いことだと思います。

■デラグレーブ／私は2010年にチームに参加して、最初の3年ぐらいは、関係がうまくいかないこともありましたが。ただその後、チームはお互いの距離が近くなり、選手同士は家族であり、友人であると思っています。

■ウィーラー／昨晚も一緒にカラオケに行きましたし、仲が良いと言えます。非常にお互いの距離が近いチームだと思います。互いに意見を激しくぶつけ合うこともありますが、それはチームのために意見をしっかり表明することをしています。

■ Wheeler / Me and Melton are the co-captains of the team. We check things when we need to and work together to make sure that the team functions well. We've split our roles into good co-captain/bad co-captain.

■ 井上 / チームをまとめるとき、どこに苦労されますか。意見が強い人もいると思いますが。

■ Melton / There's a lot we do to ensure everyone is heard. Sometimes we have meetings with just two or four people to highlight challenges, watch videos of matches to work out where problems are, and try and come up with solutions as a team.

■ 井上 / 廣瀬さんは元キャプテンとしていかがですか、ジャパンチームは。チームワーク、話し合いは、やはりスポーツでは大事なことですよね。

■ 廣瀬 / ラグビーは、監督やコーチはコーチングボックスにいて、直接指示は出せないの、選手の中で意思統一されていることが、とても重要です。いつも日本代表が大事にしていることは、勝利もそうですが、存在意義、ミッションなどを、みんなで共有できること。それが、チーム作りの大事なポイントかなと思います。

■ 井上 / コートの中には監督もいなくて、相手のプレーによって自分たちのバリエーションを変えないといけないとき、誰がどう判断しているのか、見ている側には分からないのですが、フォーメーションを変えたりなどは、どのようにされているのですか。

■ ウィーラー / 私とメルトンは、コ・キャプテン（共同主将）としての役割があります。必要があれば確認をしたり、チームがうまく機能するように一緒に役割を果たしています。良い方のコ・キャプテンと悪い方のコ・キャプテン、役割分担しています。

■ メルトン / チームをまとめるために様々なことをします。時には少人数、2～4名でミーティングをし、課題を明確にし、動画を見て、ここが間違っているとか特定し、チームとして解決策を見出そうとしています。



■廣瀬／グラウンド上にアタックのリーダー、ディフェンスのリーダー、ぶつかり合いのリーダーがいるので、イニシアチブをとっています。トライをとった後とか、誰かがケガをしたときなどの（試合が中断している）1分くらいに、まとめて話すことも大きいですし、客観的に見えないときにはコーチングボックスからインカムを通して、アイデアをもらいます。メディカルトレーナーやウォーターボーイ（水を持って行く人）などを通して情報をシェアしたりもします。

■井上／車いすラグビーは4人ですよ。4人で意見をまとめるときはいかがですか。コートの中で行っているのですか。

■Aoki／Teamwork is very important. Our motto is that we need to be frank and ensure people's true opinions are heard. Sometimes we have long, bitter arguments where no one will admit being at fault. But we trust and respect each other, so this means we let reveal our true opinions on the pitch.

■井上／なかなかシビアですね。15人と4人では、その辺はずいぶん違う感じでしょうか。

■Aoki／15-person rugby is done on a really big pitch, but the rugby we play is done on a pitch around the same size as a basketball court with a total of 8 players. But just as with regular rugby, we have to make use of the space and acquire lines. The basics of play aren't that different. Of course, the numbers of players are different and there are also a lot of other differences too.

■アオキ／チームワークが重要です。私たちは腹を割って本音を伝え合うことをモットーとしています。時に、「お前が間違っている」と言ったとき、向こう側が「間違っているのはお前だ」ということもあって、辛辣な厳しいやり取りが続くこともあります。お互いに信頼、尊敬の念を持っていますから、それを前提として、ピッチでは本音をぶつけ合うようにしています。

■アオキ／15人制のラグビーは、ものすごく広いところで戦いますが、私たちはバスケットボール規模のピッチで、計8人で戦います。共通しているのはスペースを活用する、ラインを獲得していく、その基本的な戦い方は、この2つのスポーツで違うことはありません。もちろん、フィールドにいる人数が違いますので、いろいろな面で違いもありますが。

商店街のおもてなしとバリアフリー

■井上／コミュニケーションで、チームをつくる話をしましたが、商店街も似たような感じですよ。私たちが、まちの事前点検（10月4日に実施）に行かせてもらった際、理事長さんとは熱い議論をしました。商店街はいろいろな種類のお店がありますが、まとめていくときはどのような感じでしょうか。スポーツと違い、1つ1つのお店の利益などを考える必要もあると思いますが。

■旦尾／企業などでは勤務時間は一律だと思いますが、商店はまちまちです。物販店なら昼ですし、飲食店なら夜とか。集まる時間も変えた方が良いのではということもありますが、なかなか現実的にはできません。我々も、お互いの立場を尊重し合うことが、まずあると思います。我々の商店街理事会は今 40～50 代が中心になっています。ほかの商店街に比べて比較的若い。我々の場合、競技とは違い、そこで急に意思を伝えるわけではないですが、話し合いでは、できるだけ皆の意見を聞いて、しゃべっていない人がいたら、その人にも聞くようにしながら、今、問題となっていることを解決するようにしています。

■井上／商店街として苦勞されていることも多いと思います。下高井戸商店街は、都内でも下町の雰囲気を残している商店街です。昔ながらのおもてなしの心が残っていて、うちの学生たちもおもてなししてもらいました。“おもてなし”について、商店街としてはどのように考えていらっしゃいますか。

■旦尾／店では、対面で話をする人が多いです。お客様もいろいろなタイプの方がいらして、話しかけられると緊張する人もいるし、どんどん話してもらいたい人もいます。



そういう方たちのイメージを感じ取りながら、店頭や店内で話をしたりします。例えば、今日の話にも関係してきますが、我々の商店街は、近代的とも言いきれない。品物が通路にあったりもします。お客様が手に取りにくいこともあるかもしれませんが、それを感じ取って話しかけながら、そこら辺を気づいてさしあげる。このあたりは統計的には若い人口が多いのですが、やはり買い物にいらっしゃるのは年配の方が多いです。車いすの方でなくても、歩きにくいようであれば、通路の物をどけたりもします。

下高井戸の商店街は生鮮三品が強いと言われます。近所の方々の食料品の面で、いろいろと支持をいただいていると思います。

■井上／私たちがまちの事前点検に行ったときも、車いすが通れないとき、理事長さんのお店（呉服・衣料品「双葉屋」）では丁寧に対応してくださって、「コミュニケーションをとりながら対応します」とおっしゃっていました。ほっこりして帰ってきました。瀧さんは、まちの事前点検のとき、どう感じましたか。

■瀧／今回、初めて理事長さんのお店に行きました。通路が通りやすくないとか、品物が分かりやすいところに置いていないとか、謙遜されていましたが、それよりも、普段から障害を持っている人たちが障害のない人と同じように買物を楽しんだりできるような、声かけが一番必要だと思っています。まちの事前点検に行ったときに、店員さんも温かい雰囲気ですべてくださったので、そういう意味では（ハード面では）バリアフリーではないかもしれないけれど、心のバリアフリーは進んでいるのかなと思いました。



“挑戦”に対するバリアフリー

■井上／障害のある方もない方も、挑戦する機会が誰にでも公平にあると、アオキさんの話にもあって心を打たれました。瀧さんもこの夏、何か挑戦していましたよね。

■瀧／日大のサークル「SalamatA」でフィリピンの子どもの支援をしているのですが、フィリピンに実際に行って、子どもたちに教育の大切さを伝えるための劇とダンスのパフォーマンスをしてきました。

■井上／私も一緒に行ったのですが、瀧さんを見ていて、つい「ダンスは良いから、あなたはナレーターだけやっいなさい」と言ってしまったのです。何かに挑戦することに対して、人の可能性を奪っちゃいけないと講演で言われ、少し責められているような気がしました。瀧さんも、自ら努力をして仲間から教わって踊っていました。9曲のダンスを踊ったんだよね。すごく良いと思いませんか。瀧さん、挑戦してみてくださいか。

■瀧／今、先生がおっしゃっていましたが、最初「瀧さんはダンスはやらなくて良い」と言われました。それは、先生なりの優しさだったと思います。でもメンバーが手伝ってくれて、一緒にできるようにダンスの振り付けも教えてくれた。私も1人でできることは家で練習したりして、努力はしました。

■井上／挑戦するとき、ほかの人たちが助けられることに対して、瀧さんはどういうふうに感じていますか。例えば、助けられると言っても、それはいらないと思うこともあるだろうし、いろいろな思いが交錯すると思います。



アオキさんの話にもありましたが、何でもしてもらおうことが、私への手助けじゃないよ、と思う部分があると思います。実際どうでしたか。

■瀧／最初に関わったときは、メンバーはほとんど初対面で、まず障害者と関わったことがない子が多かったと思います。その中でまずは、してくれることの全てを受け入れて、感謝の気持ちを伝えるようにしていました。次第に、「これはできるんだ」とか、サポートしてくれる子も分かってくれるようになり、私も「これは要るけど、これは要らない」と伝えられるようになってきました。そういうことを言える関係になったことが、一緒にパフォーマンスをできた一番の理由で、大切なことじゃないかと感じました。

■井上／助けてくれるという人の優しさが、必ずしも障害者の方々にはプラスにならないこともあります。そういうとき、アメリカではどのように反応されるのでしょうか。人の優しさがお節介になることもあると思いますが。

■Delagrave／You wouldn't normally just go up and touch someone for no reason, but for some reason if you're in a wheelchair, people will go up to you and try to help out. As teammates we try to help each other. Trying to help or support other people is just a normal, human thing to do.

■井上／それを「やらないでね」と言う時が難しいですね。「自分でやりたいんだけど」と言うときは、どう対応されるのですか。

■Aoki／I really think this is a communication problem too. Communication needs to be direct and strong.



■デラグレーブ／普通は、人は何の理由もなく、誰かに触ったりすることはないですが、車いすに乗っていると「お助けしましょうか」と言われることがあります。

チームメートの中でも、お互いに助け合ったりするわけですし、人に対して何か助け、サポートをするというのは、人間として極めて普通のことだと思います。

■アオキ／やはり、これもコミュニケーションの問題だと思います。直接しっかりコミュニケーションする。

When I think to myself “I can do this,” it’s important to say “It’s ok, I can do it” as soon as possible. I was discussing perception before. If you say clearly “I can do this” it can help to change peoples’ perceptions.

■井上／社会の中では、1人で移動する場面があると思いますが、そのとき、相手との信頼関係や関係性のない人に出会って、「これをしてほしいんだけど」と頼むときは、アメリカの方々は「良いよ、OK」となるのでしょうか。

■Melton / Most people will help out. Sometimes people just aren’t interested, so you have to wait around until you can find someone who is.

■Aoki / Sometimes in America the problem is that too many people want to help.

■井上／特に皆さんは、体が大きく丈夫そうですが、「ごめんなさい、重くて運べない」と言われることはないですか。

■Delagrave / As you said, I have a big body, but even then, there are people who want to help me. Sometimes if the person can’t do it alone, they have to call someone else.

■井上／瀧さん、日本はどうでしょう。

■瀧／助けてくれる人が多くて困ってしまうという話はとても衝撃的です。日本ではそのようなことはあまりなくて、逆に、助けてくれる人がいなくて困ってしまうのが現状です。

「これはできる」と自分で思ったときは、「大丈夫、できます」と、早めに伝えることが重要だと思います。先ほど、認識の話をしました。「これはできます」としっかり伝えれば、相手の認識も変わると思います。

■メルトン／大体、助けてくれる方は多いです。ただ、あまり興味を示さない方もいるので、そういったときには時間をかけて、助けてくれそうな方を待つこともあります。

■アオキ／アメリカでは、助けてくれる人が全然いないということより、助けてくれる人が多すぎるほうが、より困ることかなと思います。

■デラグレーブ／おっしゃったように、私は体が大きいほうですが、それでも助けたいという方はたくさんいます。1人で無理なら、人を呼んで2人で助けてくれることもあります。

■井上／瀧さんは、何の問題もないようにスムーズに歩いているから、助けてもらえないのでは。

■瀧／丁寧に助けを求めても、助けしてくれない人が多いです。

社会を変える力

■井上／先ほど、コミュニケーションで社会を変えろという話が出ました。皆さんは、ラグビーを通して可能性にチャレンジしていますが、スポーツにも社会を変えていく可能性を持っていると思います。どういうことで社会が変わると思いますか。

■Aoki / I think there are two ways that society can change. The first is in a physical way, that is visible. For example, this would be people participating in sports and getting healthy and having opportunities to get involved in their communities. The second, which I touched on during my speech before, is on how disability is perceived. For instance, when my mom sees me playing football, she says I don't seem disabled at all - she forgets I have a disability. She sees me as an athlete, not someone with a disability. That's another way in which society's perceptions of disability can change. I believe these are the two main ways society can change.

■アオキ／2つ、社会の変わり方があると思います。1つ目は、はっきりと目に見える形の変化。例えば、人々がスポーツに携わってより健康になったり、地域社会に関わるようになって、目に見える形で社会が変わっていくことが1つあると思います。

もう1つは、私が先ほどのスピーチで申し上げたことにも関わりますが、障害の捉え方が変わると思います。例えば、私の母親は、私が車いすラグビーでプレーしているのを見ているとき、「この子が障害を持っているとは思わない、障害を持っていることをつい忘れてしまう」と言います。一障害者ではなく、一アスリートとして見てくれる。そのような形で、社会の障害に対する捉え方が変わると思います。目に見える形で変わるものと、目に見えないけれど社会が変わる、この2つがあると思います。

■井上／廣瀬さん、ラグビーを通して、子どもたちのことなど、先ほどもメッセージを発信していただいているようですが、ラグビーを通して社会を変えるのは、結構難しいテーマですよ。いかがでしょうか。

■廣瀬／スポーツはドラマを描けないというか、シナリオ通りにいかないのが、その瞬間をいろんな人と共有できる喜びがあるのかなと思います。試合を観に行ったら、隣の人と友達になるのも、人生が豊かになる意味で良いのかなと。直接的に社会を変えることはなくても、その人の人生を豊かにすることで、社会が自然と豊かになることに寄与できているのは素晴らしいと思っています。

パラスポーツに関しては、自分たちの固定概念を変えてくれる。例えば、ブラインドサッカーでは、応援している時は声を出さず、心の中で応援しなければいけない。皆さんのスポーツのスタイルとは違う。音を鳴らして応援するのはダメなんですよね。アスリートに音が聞こえなくなるから（注：ブラインドサッカーでは、転がると音の出るボールを使用してプレーする）。このように、自分たちの固定概念を外してくれるのも良いところだと思います。

■井上／商店街では、駅伝の順位当てクイズなど、日大のスポーツをすごく応援してくれています。スポーツがまちを変えていくと感じたことはありますか。

■且尾／選手が一生懸命走ったり、何かに向かって見ている様子を見たとき、我々は違う環境にいますが、そのときは同じような気持ちになって見られます。敵も味方もいますが、一生懸命な普段と違ったものを我々に与えてくれるということがあると思います。



■井上／スポーツには、感動を与えてもらえますよね。そこがどうまちづくりに繋がっていくのか。アオキさんの話だと、スポーツがきっかけで障害者のことを理解してもらって、まちを変える。ADA法など、アメリカは一歩も二歩も進んでいます。

これから、皆さんがスポーツを通して社会を変えていくという中で、ここがポイントだということをお一人ずつお聞かせ願えればと思います。

■Delagrave／This is part of our team culture, but I believe that working to enhance each other is extremely important. Obviously, I want to win, but it's not just about that - I focus on the process too. Working to enhance each other helps us be better people. This is true regardless of whether you play sports or not, or have a disability or not. It helps to change society.

■Aoki／When people watch pro sports, you can see a wide variety of emotions on their faces. But connecting these emotions to actions is difficult. It's difficult, but also important. Having emotion and energy at the level of regional society, then eventually bringing it down to an individual level. We need to welcome the passion felt when watching sports and then utilize it. I think that the Olympics and Paralympics are really good examples of succeeding at this.

■井上／廣瀬さんは、いかがですか。

■廣瀬／スポーツに限らずですが、自分が今いるコミュニティともう1つ、別のコミュニティができることは、人間的にもチーム的にも安心して生きていくには必要だと思います。



■デラグレーブ／やはり我々のチームの文化としてもありますが、お互いを高め合うことが非常に重要だと思います。もちろん勝ちたい気持ちはありますが、それだけではなく、プロセスを重視する。お互いを高め合って、よりよい人間になるということです。これはスポーツをやっているとき・やってないとき、障害がある・なしに関係なく、それによって社会が変わっていくと思います。

■アオキ／特にプロスポーツを観客、視聴者が見ているとき、感情がいろいろ湧き起こると思います。それをアクションにつなげること、ここがかなり難しいと思います。ただ、難しいけれどそれが重要で、感情、エネルギーを地域社会レベル、ひいては個人レベルに落とし込むことが重要です。スポーツを見るときに感じる熱意を受け入れて活用していくこと。オリンピック・パラリンピックはそれを実現する、非常に良い1つの例だと思います。

ここしかないとなると、そのコミュニティがしんどければ全てがしんどくなりますが、もっと違うコミュニティがあって、そこで息抜きができて、いろいろ話ができるとなれば、楽に生きることができる。スポーツじゃなくても、違うコミュニティを持つことは大事ではないかと思えます。

パラスポーツは、やってみるのが一番早いと思うので、体験して、その感覚を持つことも大切なと思います。ぜひやってみて、車いすの難しさとか、いかにこの人たちがすごいかということを感じていただき、その上で実際に観にいくと、もっと面白くなると思います。



「ノーサイドの精神」

■井上／皆さんから素晴らしい発言をいただきました。とは言え、強い相手と当たって「あいつには負けたくない」と思うこともあると思います。ラグビーは「ノーサイドの精神」がありますが、人の心ですから、ライバルがいれば倒したいと思うでしょうし、負けた時は悔しいでしょう。そのようなときはどうされていますか。

■Aoki／Wheelchair rugby also has a spirit of “No Sides.” When a match ends it doesn’t matter if we’re enemies or friends, we’re all just members of the rugby community.

■井上／本当にそう思えるものでしょうか。心の中では違うことを思っていたりして（笑）。

■廣瀬／それじゃ、あの笑顔はできないと思います。嘘の笑顔では感動しないと思います。

■井上／なぜラグーマンたちは、「ノーサイドの精神」を身につけられるのでしょうか。

■アオキ／車いすラグビーの世界でも「ノーサイドの精神」はあります。試合がいったん終わったら、敵味方関係なく、車いすラグビーのコミュニティの一員だと感じています。

■廣瀬／自分たちだけじゃラグビーはできないし、相手が強いからこそ、自分たちのトレーニングも頑張れるという精神を持っています。元々ラグビーはレフェリーがいなくて、互いに選手同士で戦ってきたという歴史もあるので。“自分たちだけがよければハッピーというわけではない”というのも、初めから持っている価値観だと思います。

■Aoki／I believe that wheelchair rugby has two major aspects.

The first is physical. If you have a strong sense of rivalry, you need to let that out on the pitch. That's because rugby is a contact sport that allows for tackling.

The other aspect is that everyone who is playing the sport is there because they've had a life changing injury. Going through an experience like that makes us members of the same community, being friends or enemies is irrelevant.

■井上／「ノーサイドの精神」って難しいところがあります。勝ちたいし、成功したいし、失敗したくないし、失敗したらどうしようかという気持ちもある。

「ノーサイドの精神」をお持ちの皆さんから、ぜひ子どもたちや若い人にメッセージを。

■廣瀬／自分が本当に出し切ったという思いがあれば、自然と相手に対する尊敬の念が生まれると思います。それがないと、邪心や誰かに何かを求めたりすると思うので、全力を尽くすということが大事だと思います。

■井上／日本のスポーツが難しいのは、勝たなきゃ意味がないという指導者が多くて、子どもたちが負けると怒鳴られたりとか、そういう指導をよく見かけます。廣瀬さん、そこは大事ですよ。

■アオキ／車いすラグビーは2つの側面があると思います。

まず、フィジカルな部分。ライバル心を燃やしているとき、それはピッチ上で表現すれば良い。タックルができるコンタクトスポーツなので。もう1つの側面は、車いすラグビーをやっているということは、誰しもが人生を一変させるケガなり、そういった悲しい経験をしているので、そういったことで敵味方関係なく一員だという感情を持っています。



■廣瀬／個人的には、勝敗だけで人を評価するのは極めて問題だと思っています。勝ち負けはコントロールできるものじゃなく、相手があるものです。もちろんそこに対する評価もある程度は必要になりますが。

もう1つ大事なものは、自分の成長に対する評価。去年より今は良いね、今日より明日よくなるうねと、ちゃんと見てあげることが、教育として必要だと思います。

■井上／今廣瀬さんがおっしゃった、スポーツが果たす教育の役割、アメリカではいかがですか。アメリカのスポーツは、勝つことだけではなくて楽しむスポーツだ、とよく言われますが、どうでしょう。

■Delagrave／ In America, youth sports are a gigantic industry. That's partially because it's so profitable.

The desire to win, though, comes from the fact that sports require skill. It's also because there's an image of creating and using strategies during matches to win.

I have a kid. My hope for my kid is that they will learn to play sports using the right methods in the correct way. If they do, this will show that it's not all about winning.

■井上／素晴らしいですよ。そういう考えを持った指導者が、いっぱい日本にもいてくれるとうれしいです。

■デラグレーブ／アメリカは今、若い人のやるスポーツが1つの大きな産業になっています。それが大きな利益をもたらしている側面もあります。

なぜ、勝つことにこだわるのかということですが、やはりスポーツをするからには、技術が求められます。また作戦、戦略を通じて試合を行って勝つイメージがスポーツにはあるからでしょう。

私は子どもがいます。その子どもに対して私が願うことは、正しい方法で、あるべき姿でスポーツをやってもらいたいということです。すると、勝つだけが全てじゃないということになります。

相手に敬意を持つ

■井上／ここで会場の皆さんから質問を受けたいと思います。ワールドチャンピオンに会うことはなかなかないですし、元キャプテンもいて、商店街のキャプテンもいますよ。

■会場／下高井戸商店街の理事長さんにお聞きします。ワンチームの日本代表を見て、商店街に参考になることは、何でしょうか。

■且尾／私も実は、にわかと言われるかもしれませんが「ノーサイドゲーム」のドラマを見て、モールもラックも分からないところから、ラグビーがだいぶ分かるようになりました。力と力のすごいぶつかり合いですね。サッカーや野球は、時間の間合いがあるんですが、ラグビーは力を出し切っている。昨日、残念ながら南アフリカに敗れましたが、チームジャパンは本当に力を出しました。

我々商店街でも力をどこまで出し切れるか。時間などの制約がある中で、自分のできることを精一杯やって、感動を与えられれば。我々がやったことで何か社会に貢献できることがあれば良いなという気がします。

■会場／アオキ選手の講演のところで、私の心に響いたことがありました。何でいつも自分たちが説明しなければいけないのか。健常者がどうやって勉強するのか。

数ではどうしても健常者のほうが多くて、障害のある人が伝えたいことを発信するのに勇気がいたり、難しかったりします。健常者がそういうことを学ぶ場は、どういうきっかけや、どういう場所で作られていたら良いのでしょうか。自分の子どもにも少し病気があるので、その辺りの話をもうちょっと伺えたらと思います。



■ Aoki / Respect and learning is more important than anything else. When you tell your thoughts to others, it's important that you respect the people you are trying to tell your thoughts to. Even when talking about disability, my disability is different from other people's disabilities. There are also problems for elderly people too. You can't just talk about disability in broad strokes. Learning that is really important.

It's vital to communicate and respect each other. It's also important to work to communicate as well as possible, and respect the people you're dealing with.

■ 井上 / 結構、難しいですね。学生たちもボランティア活動などをして、コミュニケーションをとって相手を理解することがないと、想像だけではできないし。子どもさんたちにも、いろいろな所で、いろいろな体験ができるプログラムがあると良いですね。今日は世田谷区の教育委員会の方もいらしていたので、そういった良さを生かしていただければなと思います。日本は今までは“閉じ込めてしまう福祉”でしたが、それではダメで、障害がある人もない人も、同じ所で同じように学べるとうろができると良いし、こういうシンポジウムも開かれれば良いと思います。

2020 年に向けて

■ 井上 / 最後は、それぞれのシンポジストの方々に、来年に向かってのコメントをいただきたいと思います。

■ 瀧 / 2020 年にオリンピック・パラリンピックが日本で開催されることが決まってから、バリアフリーなどが充実し始めていると、私自身とても感じています。

■ アオキ / 大切なことは、尊敬と学びです。私たちが自分の考えていることを他の人に伝えるときに、伝えようとする人たちに対して、敬意を持つことが必要です。障害といっても、私が持っている障害と他の人たちが持つ障害は違うし、お年寄りの中にもいろいろ困る問題を持っている人もいます。ひとくくりに障害とはこう、とは言えない。それを学ぶことが、非常に重要だと思います。

コミュニケーションをとって、お互いに敬意をもつことが必要。そして、一番良いコミュニケーションをとりたいと努力をしながら、敬意を持って他の人に接することが大切です。

それがそこで切れたらいけないと思います。大会終了後もずっとそれがつながって、よりもっと推進されれば良いなと思っています。

■井上／瀧さんは何をチャレンジしますか。

■瀧／来年はまたフィリピンに行きたいし、私は社会福祉士の国家試験を受けるために今勉強しているので、そのために必要なソーシャルワーク実習に行きます。

■且尾／私は今日の話をお聞きして、商店街で何ができるか考えていくことが重要だと思いました。設備面で、急に通路や店を広くするとか、物を減らす、ということはなかなかできませんが、それを自分たちのできる心遣いや気づきで何とかしていきたいと思います。

昔スキー場で、一本足で滑っている人を見たことがあります。片足で、普通に超えられないようなところをジャンプしながら、気持ちよく、きれいに滑っていて、すごいと思いました。

健常者とか、健常者じゃないとかではなく、みんなそれぞれ、できること、できないことがある。それは、いろんな分野があるというだけのことです。それを今日の話聞きながら思いました。とにかく我々ができる範囲で、商店街は資金力もあまりあるわけではないけれど、できることでバリアを少しずつ減らしたいと思いました。

■廣瀬／前回のワールドカップでは、日本チームは3勝1敗でクォーターファイナル（準々決勝）まで行けませんでした。今回は行けました。次はベスト4に向けてどのような準備をしていくかが重要だと思います。

どうすれば良いか。1つは、トップリーグ、上のクラスを充実させていく。



強い国と定期的に試合をしていくこと。もう一つ、長期的に考えると、グラスルーツ、裾野を広げていかなければいけない。ラグビーだけでなく、車いすラグビーを半年やって、ラグビーを半年やるとか、サッカーをやるとか、いろいろなスポーツを体験できるアカデミーを作っているようなことができれば、うれしいなと思います。

来年のパラリンピックでは、決勝戦が日本対アメリカになると良いですね。良い試合を見たいです。車いすラグビーの素晴らしさが伝わるような試合をしてほしいし、それをどういふふう

にサポートするのが大事だと思います。僕自身は、「スクラムユニゾン」というプロジェクトをやっています。出場国の国歌を覚えて、スタジアムで一緒に歌おうというものです。アメリカもそこにももちろん入っています。YouTube で検索してください。それを覚えて、試合中は敵ですが、試合前後は一緒に応援する。日本の国歌もアメリカの国歌も歌って、良いパフォーマンスの手助けができれば、良いレガシーになっていくのではないかと思います。

■井上／今日は、「サンキュー・ジャパン」のキャンペーンで来てくれましたが、アメリカチームの皆さんは来年に向かっていかがでしょうか。パラリンピックもありますので、それなりに燃えるものをお持ちですか。

■Wheeler／I think we'll continue what we've been doing up until now. I want to continue with this amazing team culture we have of supporting each other and helping each other to grow. We have a family-like culture in our team. I hope to continue this and aim for a gold medal.



■ウィーラー／我々が今までやってきたことを続けるまでだと思います。我々が持っている素晴らしい文化、つまりお互いを支え合い、成長し高め合うことを続けていきたい。家族という文化がチームにありますので、それを続けて、最終的にはもちろん金メダルを目指したいです。

■井上／今日は世田谷区と日本大学共催で、シンポジウムをやらせていただきました。障害があろうがなかろうが、スポーツを愛する人がいます。コミュニケーションをいかに取るのかという点で、今日も通訳の方に助けてもらっていますが、言葉を乗り越えたところでコミュニケーションができるのが、スポーツの良さだと思います。YouTubeにもアップされています。すごいです。あんなにぶつかって、本当に大丈夫なのかということをやられています。みんなで盛り上げていけば、選手の皆さんも頑張ってもらえると思います。障害あるなしに関わらず、これからも良いスポーツをしてください。

世田谷区はユニバーサルデザインの都市なので、スポーツだけではなく、様々変わっていければと思います。日本大学も同様です。今、建て替えが順番に進んでいます。1つだけ歴史的な建物が残っていますが、それは学生がお互いに助け合える場になれば良いと思います。皆さんにも、お力添えをお願いします。

今日は世田谷区、アメリカ大使館、アメリカチームの皆さん、廣瀬さん、商店街の理事長にも参加していただき、ありがとうございました。

